

33

ナルニア国物語 2

ライオンと魔女と衣装だんす

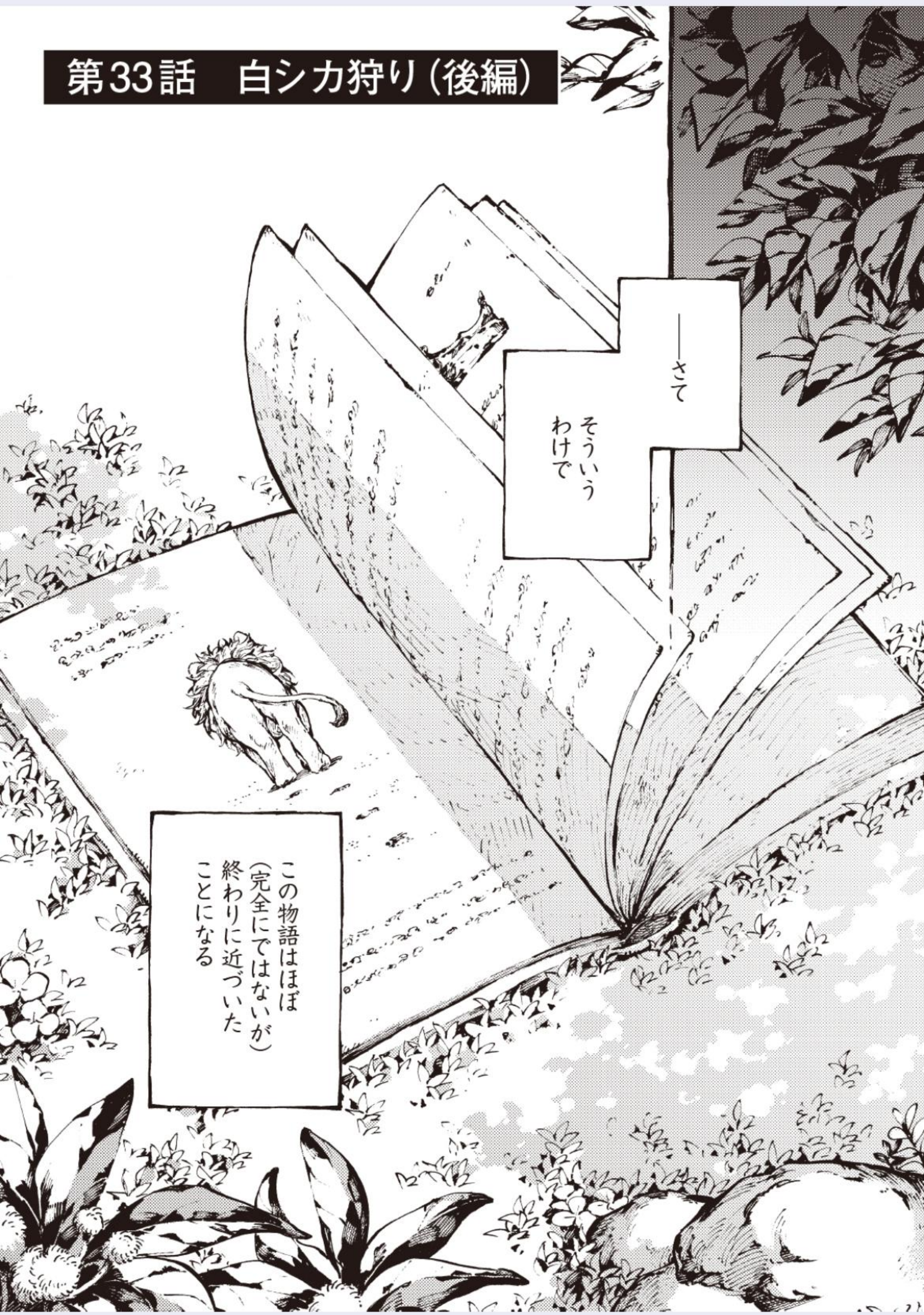
C・S・ルイス

土屋京子・訳

玉樹庵・画

(光文社古典新訳文庫刊)

第33話 白シカ狩り(後編)



——さて

そういう
わけで

この物語はほぼ
(完全にではないが)
終わりに近づいた
ことになる

二人の王と
二人の女王は
ナルニアを
よく治め

その治世は
長く続き

幸せな
時代であつた

初めの
うちは



多くの時間が
白い魔女の軍の
残党狩りに
費やされ

辺境の森で
邪悪な生き物が
うろついているという
報告が聞かれた

実際
長いあいだに
わたって

どこそで
幽霊が
出たとか

どこそで
殺害事件が
起こったとか

人狼を
見たという
報告が
あったかと思えば

翌月には
鬼婆が
出たという
報告があったり



最後には
いまわしい
化け物どもは
撲滅された

しかし

四人の
王と女王は
正しい法を定め

平和を守り





善良な木々が
不必要に
切り倒されるのを
防ぎ

ドワーフや
サタイアの
子どもたちを
つまらない学校から
解放し

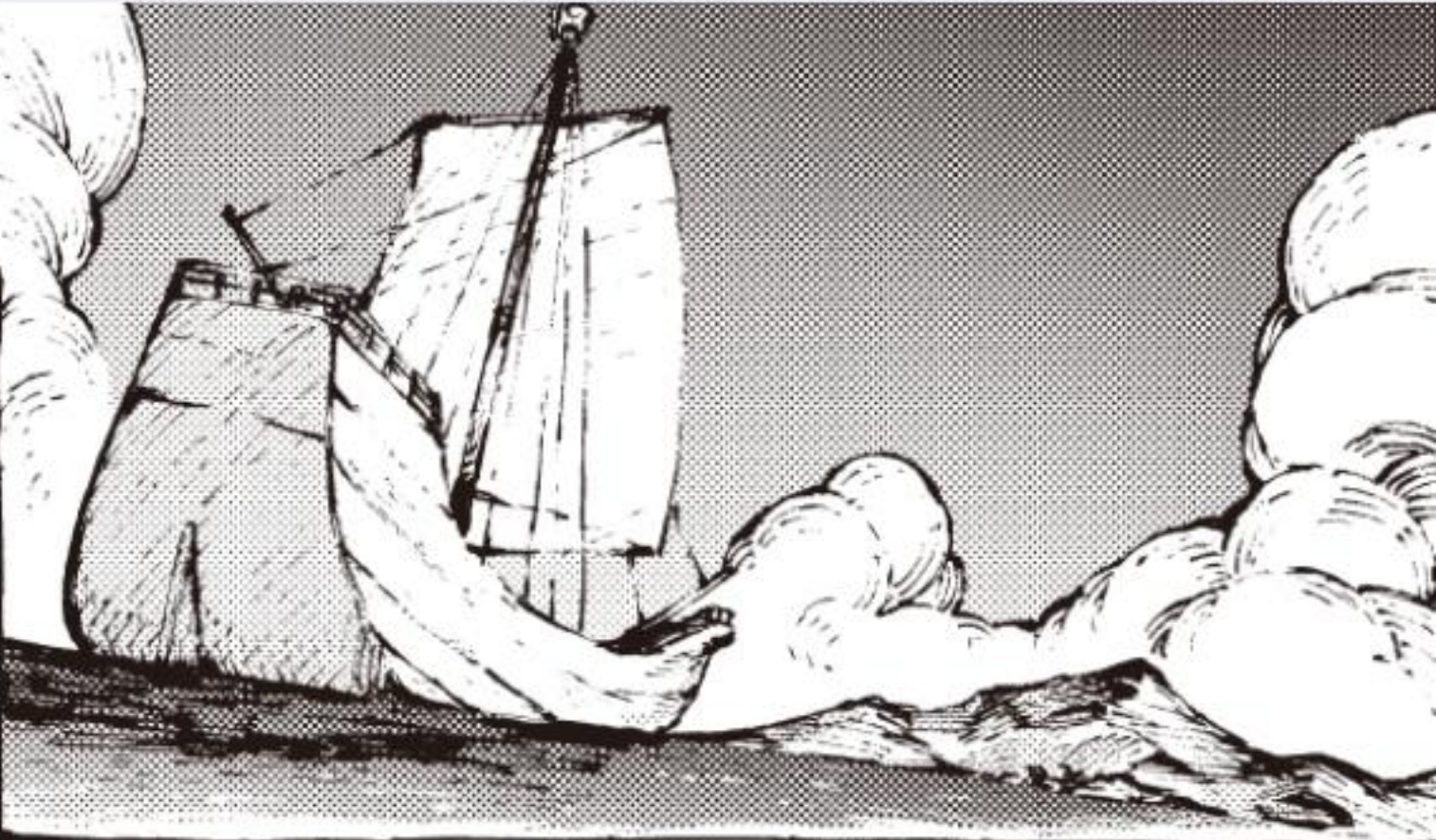
他人への
いらぬ世話焼やきや
口出しを
やめさせて

ナルニアを
誰もがそれぞれに
楽しく生きられる
国にした

北方から
獰猛な巨人族
(ランブルバフィンとは
大きく異なる
種類の巨人族)が
国境を越えて
攻めてきたときには

これを
撃退した

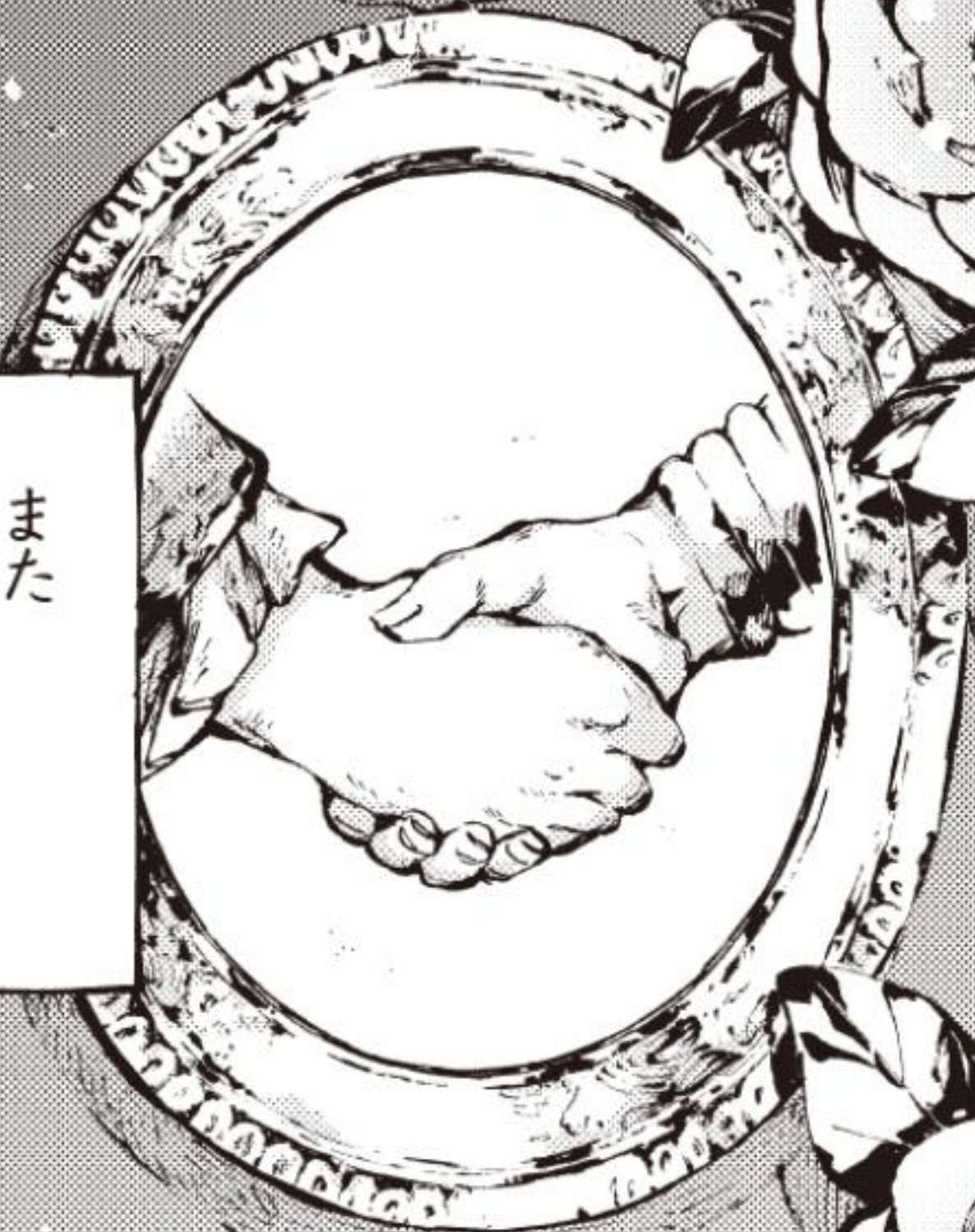




ナルニアは
海のおこうの
国々とも
友好関係を結び



王や女王が
国賓として
彼の地を
訪問したり



また
相手国の王族を
国賓として
ナルニアに
招いたりした



歳月を
重ねるに
つれて

四人は成長し
変化していった





ピーターは
長身で胸板の厚い
りっぱな戦士となり

「偉大なる
ピーター王」と
呼ばれた



海のかなたの
国々の王たちは
使者をよこして
スーザンに結婚を
申しこむようになった

スーザンは
背の高い
優雅な女性に
成長し

黒髪が
足にとくほど
長くなり

スーザンは

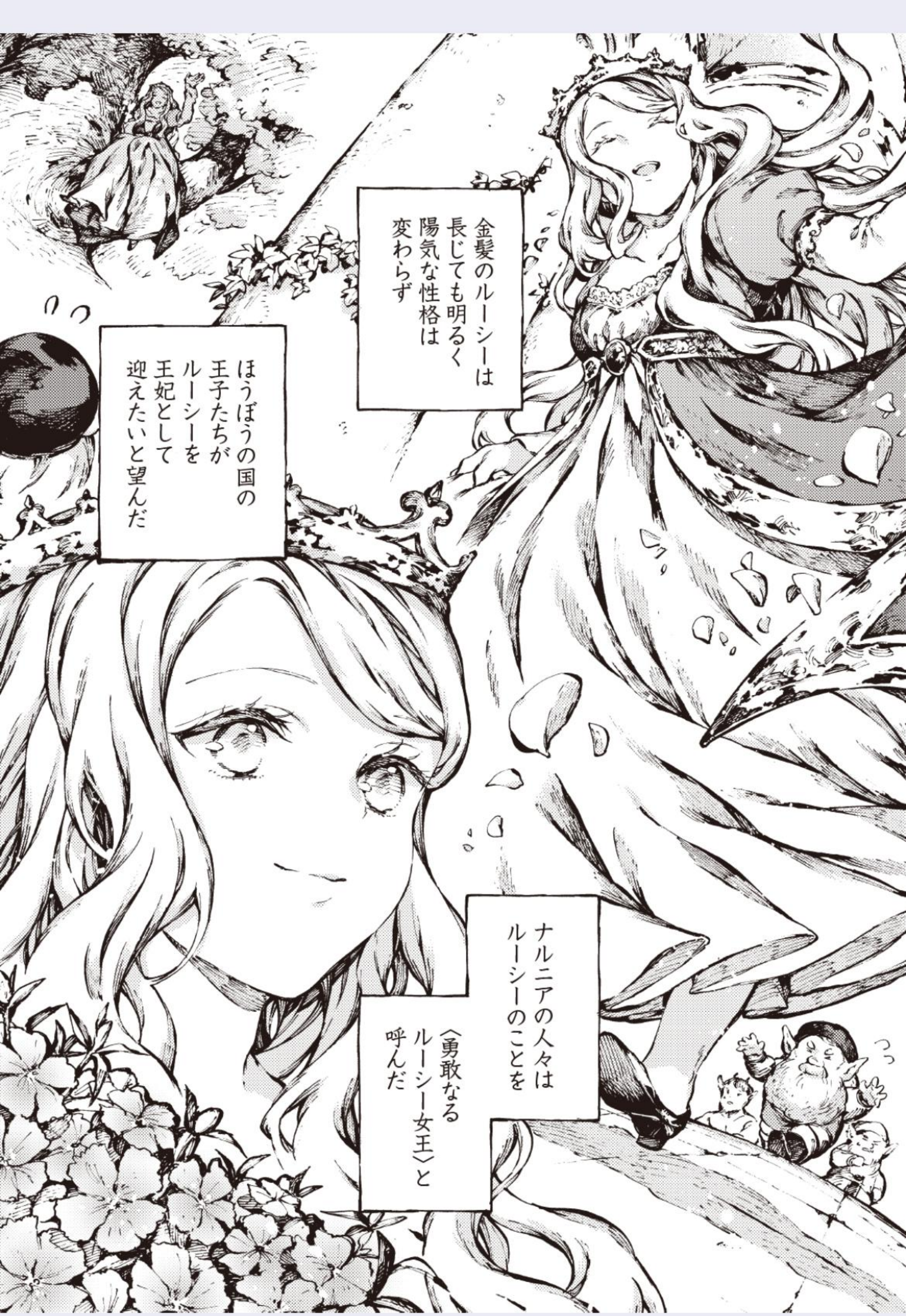
「優美なる
スーザン女王」と
呼ばれた

エドマンドは
ピーターよりも
まじめで
口数の少ない
青年に成長し

会議や
裁判において
高い能力を
発揮した

エドマンドは

（うらただ
へ心正しき
エドマンド王と
呼ばれるように
なった）



金髪のルーシーは
長じても明るく
陽気な性格は
変わらず

ほうぼうの国の
王子たちが
ルーシーを
王妃として
迎えたいと望んだ

ナルニアの人々は
ルーシーのことを

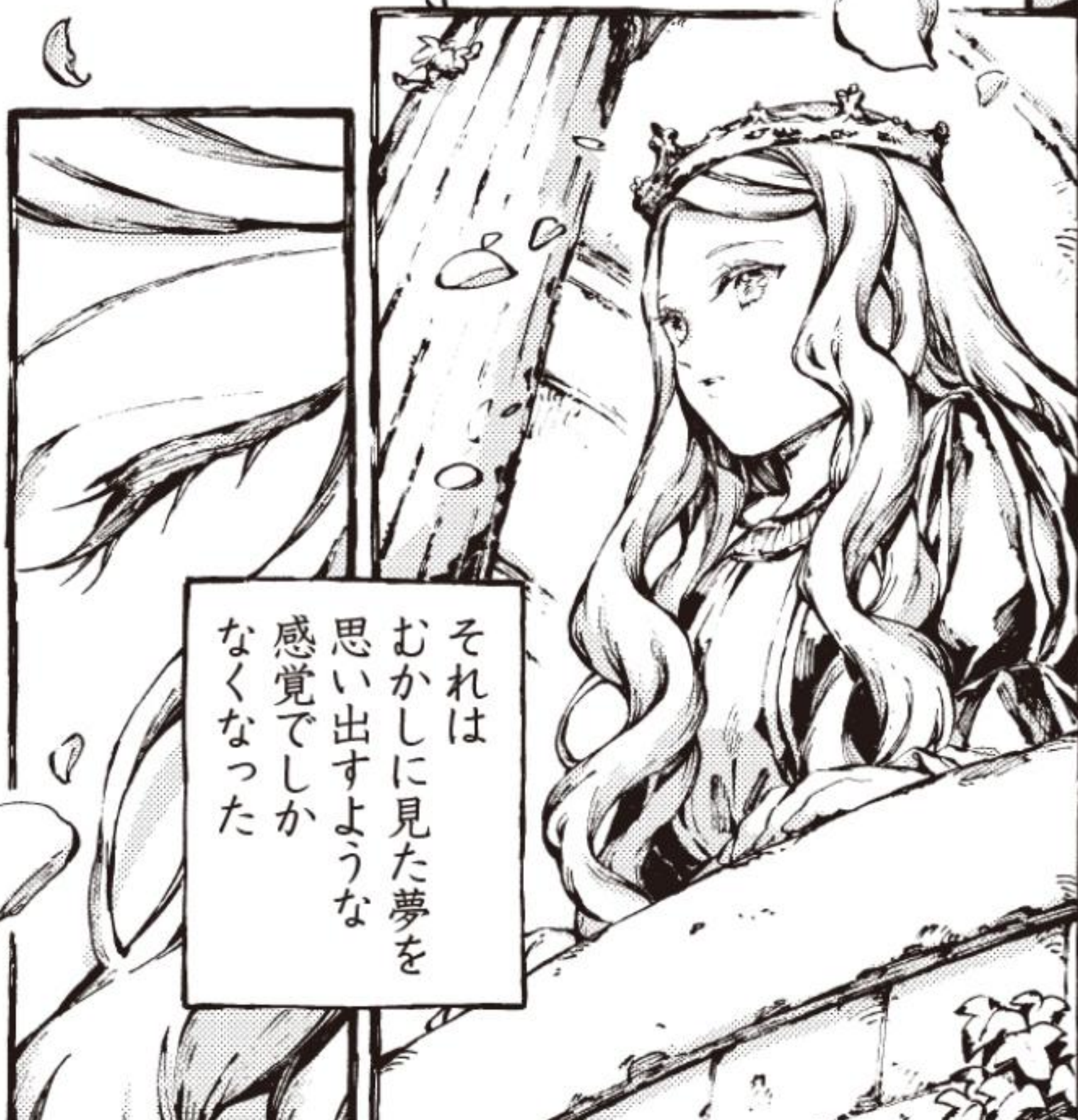
〈勇敢なる
ルーシー女王〉と
呼んだ



こうして四人は
おいしいなる
歓びの日々を送り

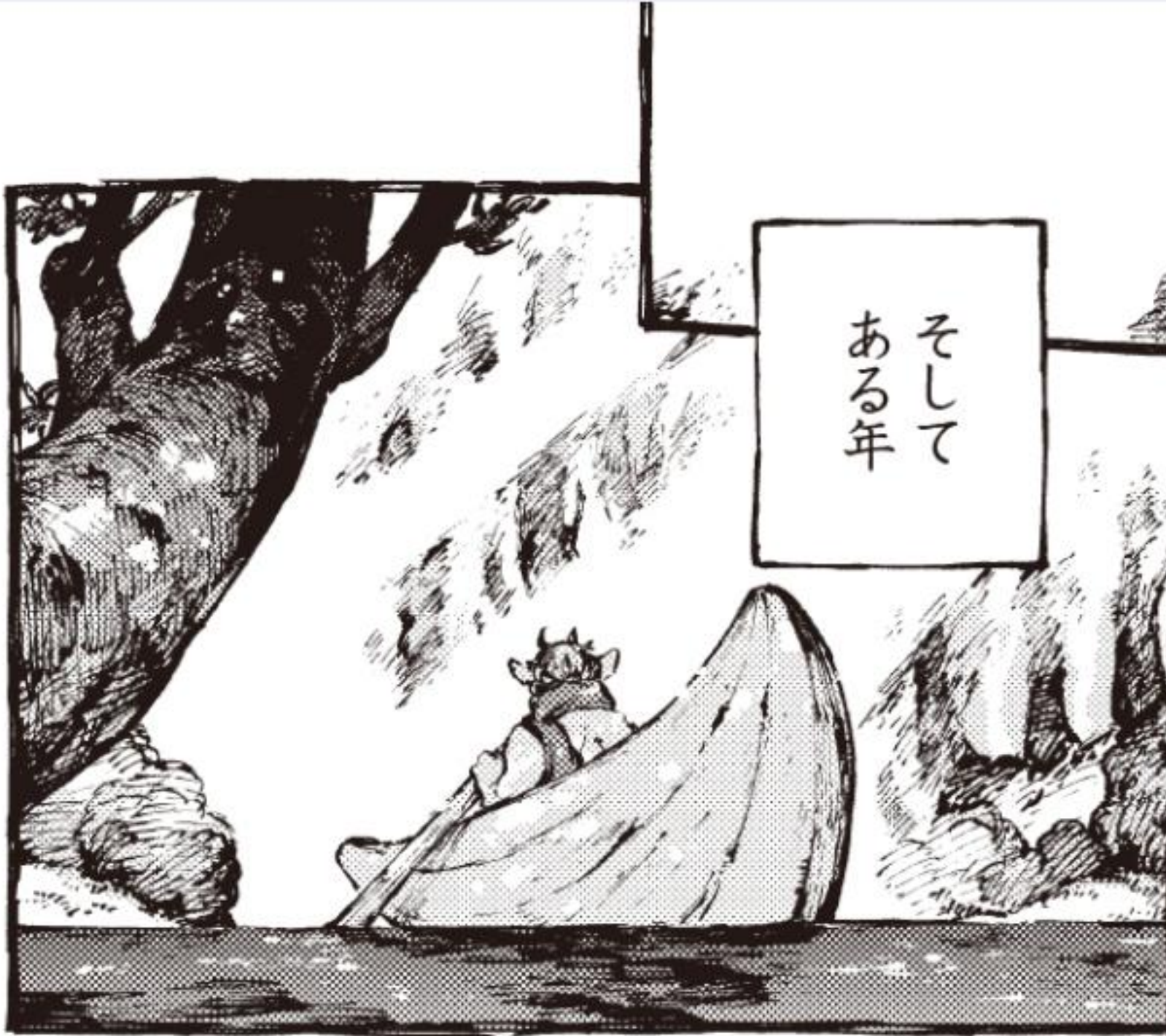


こちらの世界の
暮らしを
思い出すときが
あったとしても



それは
むかしに見た夢を
思い出すような
感覚でしか
なくなつた





そして
ある年

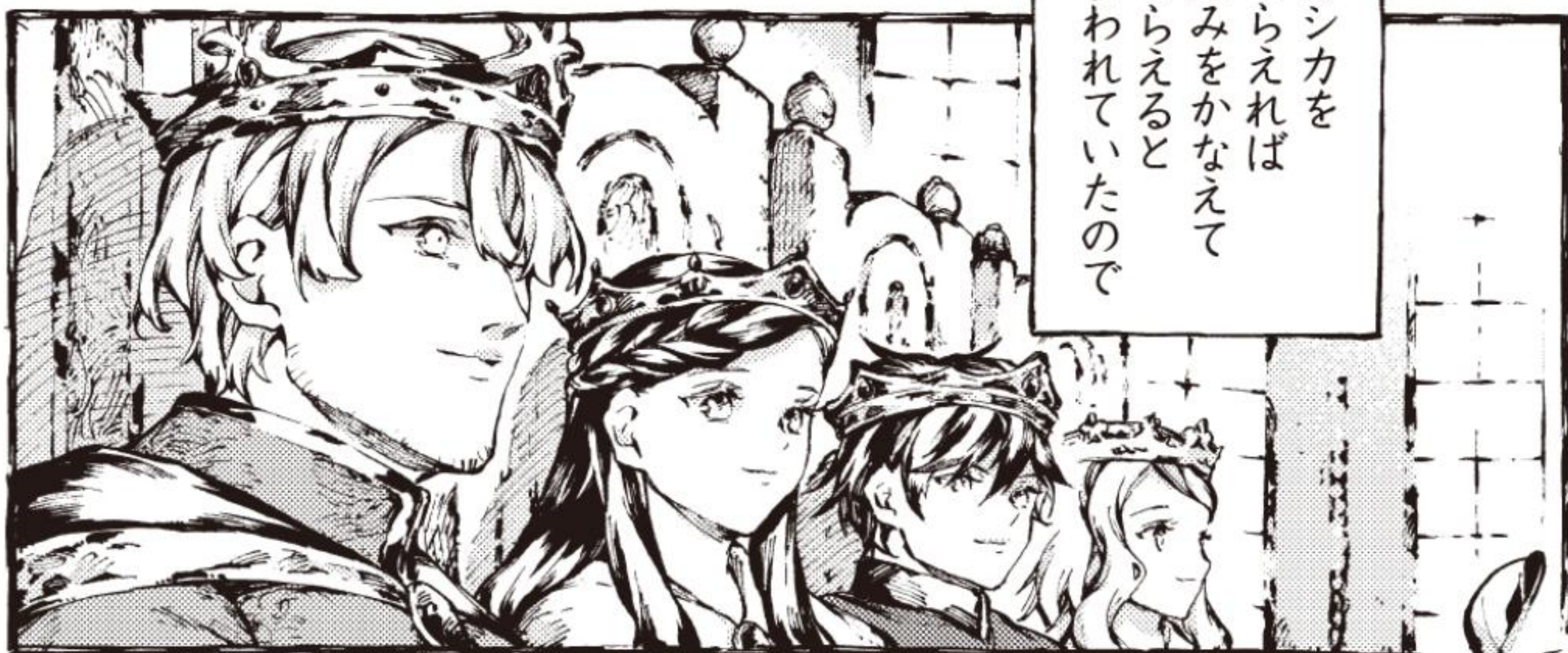


タムナスが
川を下って
やってきて



タムナスの
住んでいるあたりに
また白シカが
姿を見せたという
知らせを届けた

白シカを
とらえれば
望みをかなえて
もらえる
と言われていたので



二人の王と
二人の女王は
宮廷のおもだった
者たちを連れて
馬にまたがり

角笛を持ち

猟犬たちを
連れて

白シカを追って
〈西方の森〉へ
狩りに出た



じきに
白シカが
姿を見せた



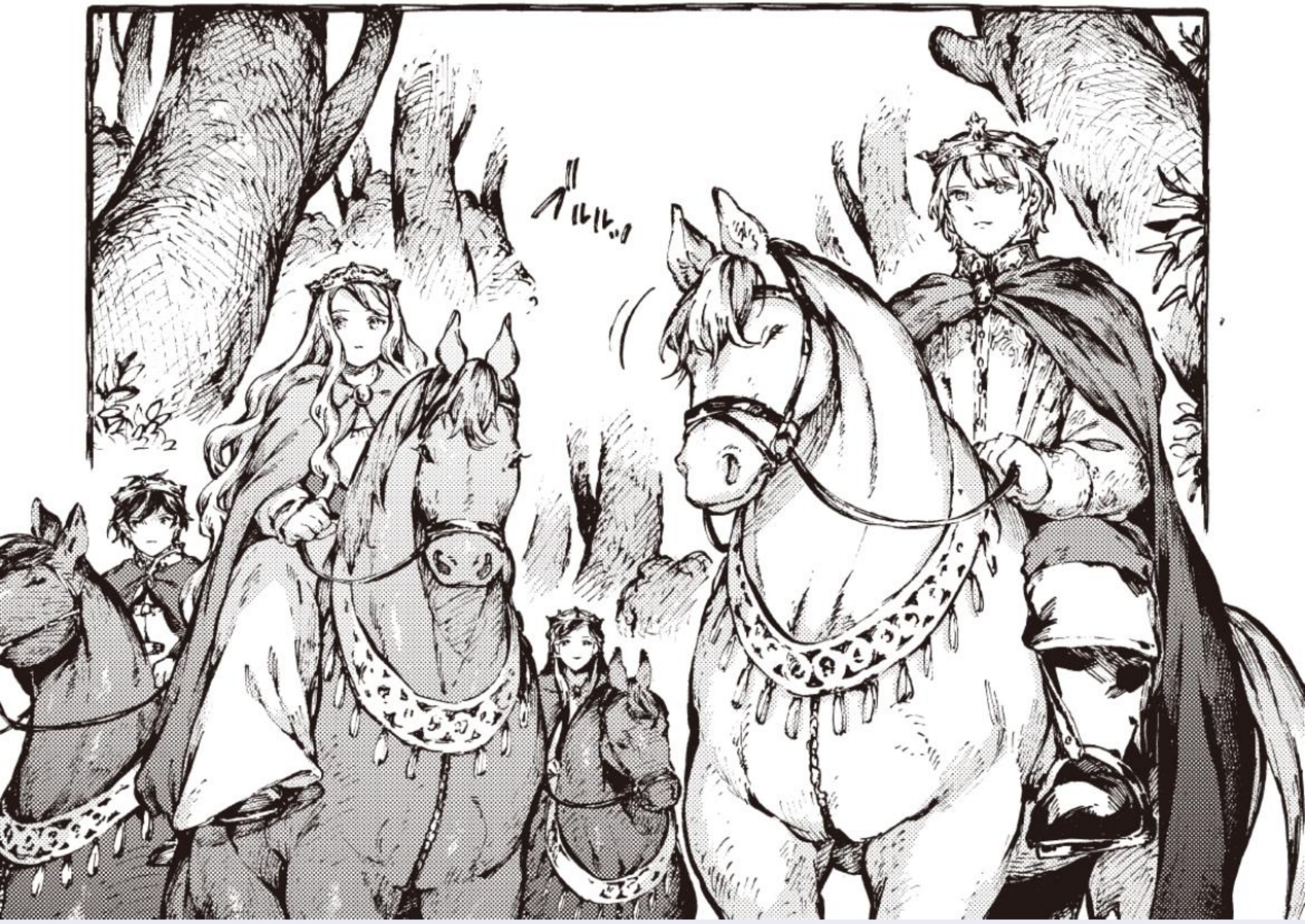


一行は
白シカを追って
丘や谷を越え

木立ちや草原を
駆けつづけたが

そのあいだに
廷臣たちの馬は
すべて疲れて
落伍し

王と女王の
四人だけが
狩りを続けた









みなさま
がた

かなたに
異なる
ものが……



どうやら
鉄でできた
木のごとくに
見受けますが



いかにも

されど

目を凝らして
見ますれば



あれは
鉄の柱の上に
ランタンを
載せたものと
見受けまする

ライオンの
たてがみに
かけて

なんと
不可思議なる
代物よ





かくも
木々の繁き
ところ

木々の高く
茂りおる場所に

ランタンを
置くとは

たとえ火を
ともしたと
しても

これでは
誰の目にも
届かぬでは
ないか！

兄上

おそらくは
この柱とランプが
ここに据えられし
折りには

あたりの
木々が小さく

あるいは
少なく

あるいは
皆無であつたのかも
しれませぬ

この森は
いまだ
若くして

しかるに
鉄の柱は
ずいぶん古いものと
見受けまするが
ゆえ

何ゆえか
わかりませぬが

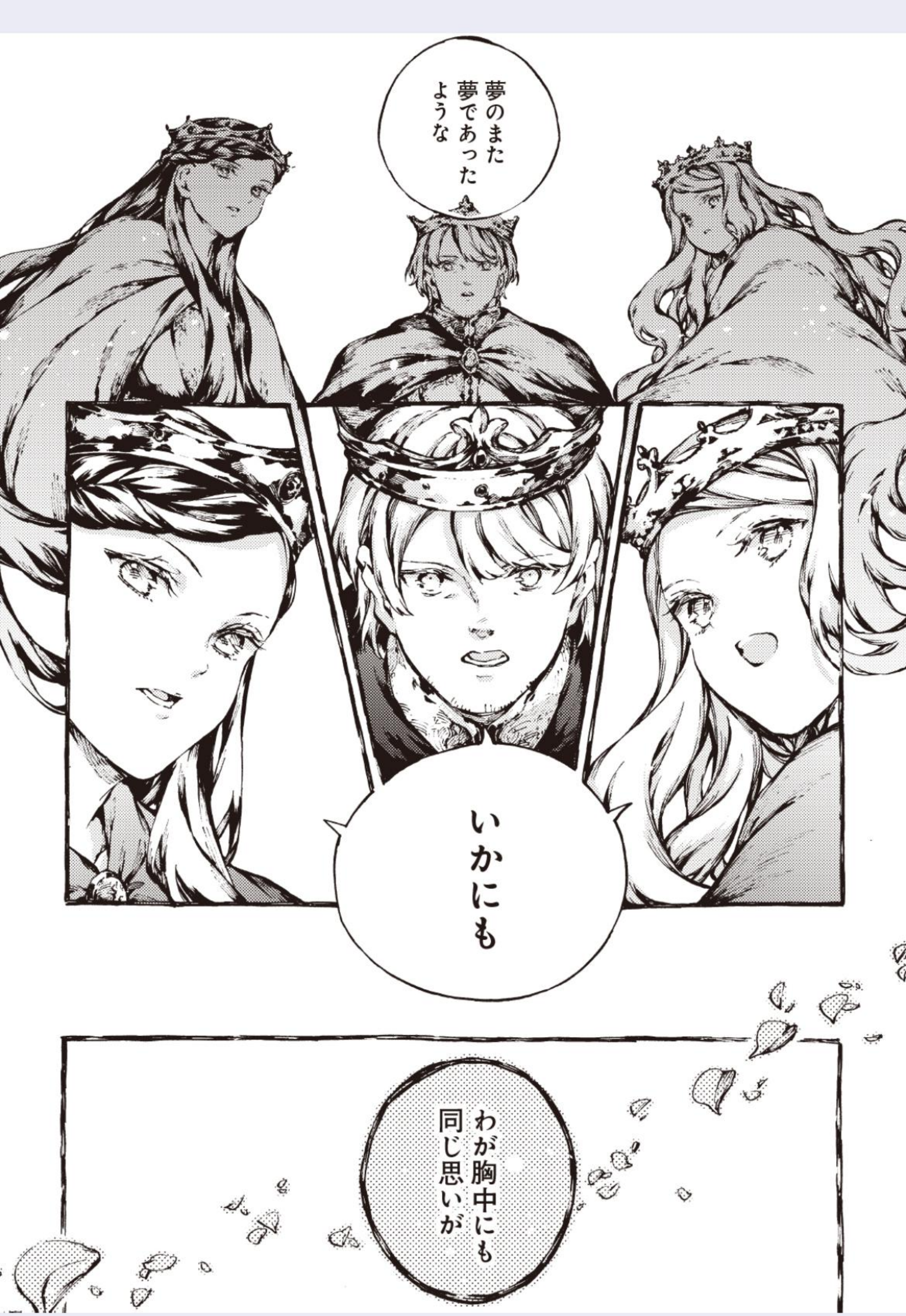
夢の中で
あったような……

この
鉄柱にのせたる
ランプは

わが心に
不思議な働きを
およぼします

このようなものを
いつぞや
見たことが
あるような気がして
なりませぬ

いや



夢のまた
夢であつた
ような

いかにも

わが胸中にも
同じ思いが



それだけでは
ござりませぬ

わが
胸中に

なぜか
振り払うことの
できぬ思いが……

この柱と
ランタンを越して
先へ進めば

不思議な冒険を
見出すか

はたまた
運命の
おおいなる変化が
起こらんとするやに
存じます



…お言葉
だが

されば

わたくしは
これにてお暇を
いただきたく

われら四人が
ナルニアの
王となり
女王となつてから
今日まで

何事であれ
いったん
重要なことがらに
着手したからには

結果を得ずして
途中で
あきらめたことは
ござりませぬ

戦にせよ

冒険の
旅にせよ

武芸にせよ

正義の
裁きにせよ

われらは
着手した
以上

何ごとによらず
成しとげて
まいったでは
ござりませぬか

姉上

兄上の
おっしやる
とおりです

これほどの
高貴なる
獲物を

恐れや
胸騒ぎを理由に
あきらめると
あらば

われらが
名折れと
存じまする

…しからば

わたくしも
同意見に
ござりまする

この胸騒ぎが
いかなる
意味を有する
ものなるかを

わたくしは
ぜひとも
明らかにしとう
存じます

ナルニア全土と
すべての島々における
最高の宝石を
引き換えにと
言われても

ここでおめおめと
引き下がるわけには
まいりませぬ

アスランの
名にかけて



皆々様が
さように
申されるならば

ともども
先へ進み

ふりかかる
冒険を受けて
立ちましようぞ

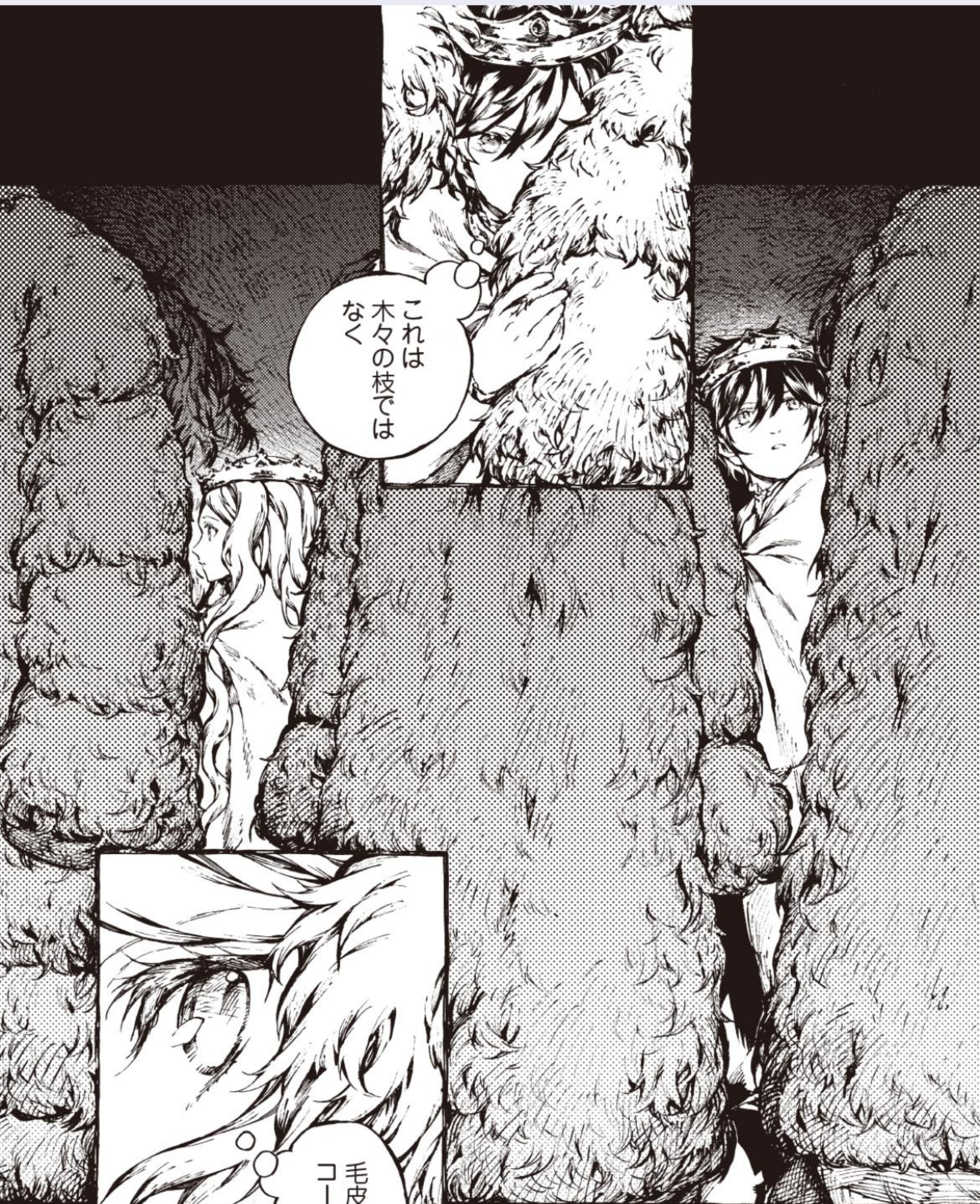
++

++

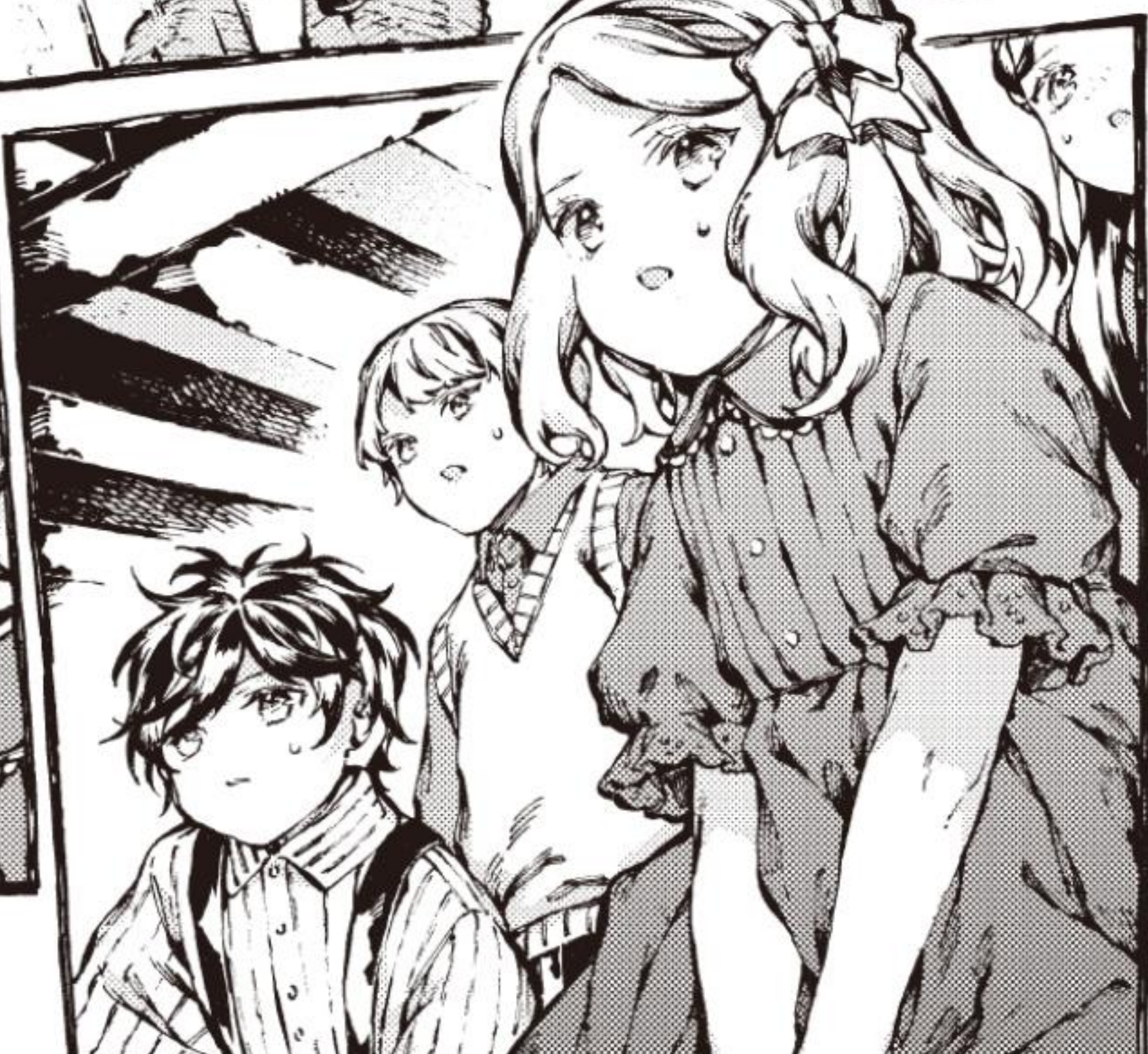
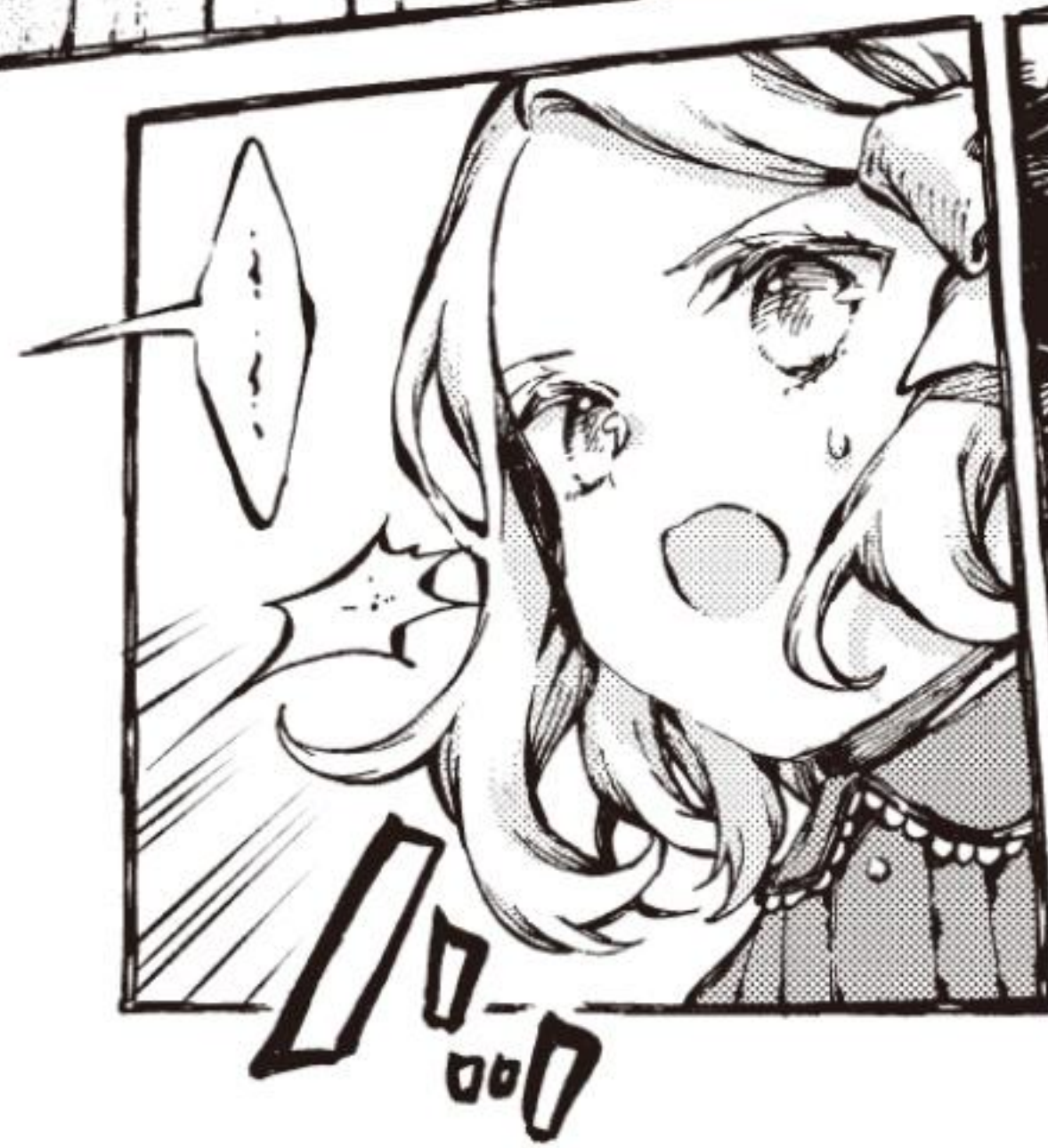
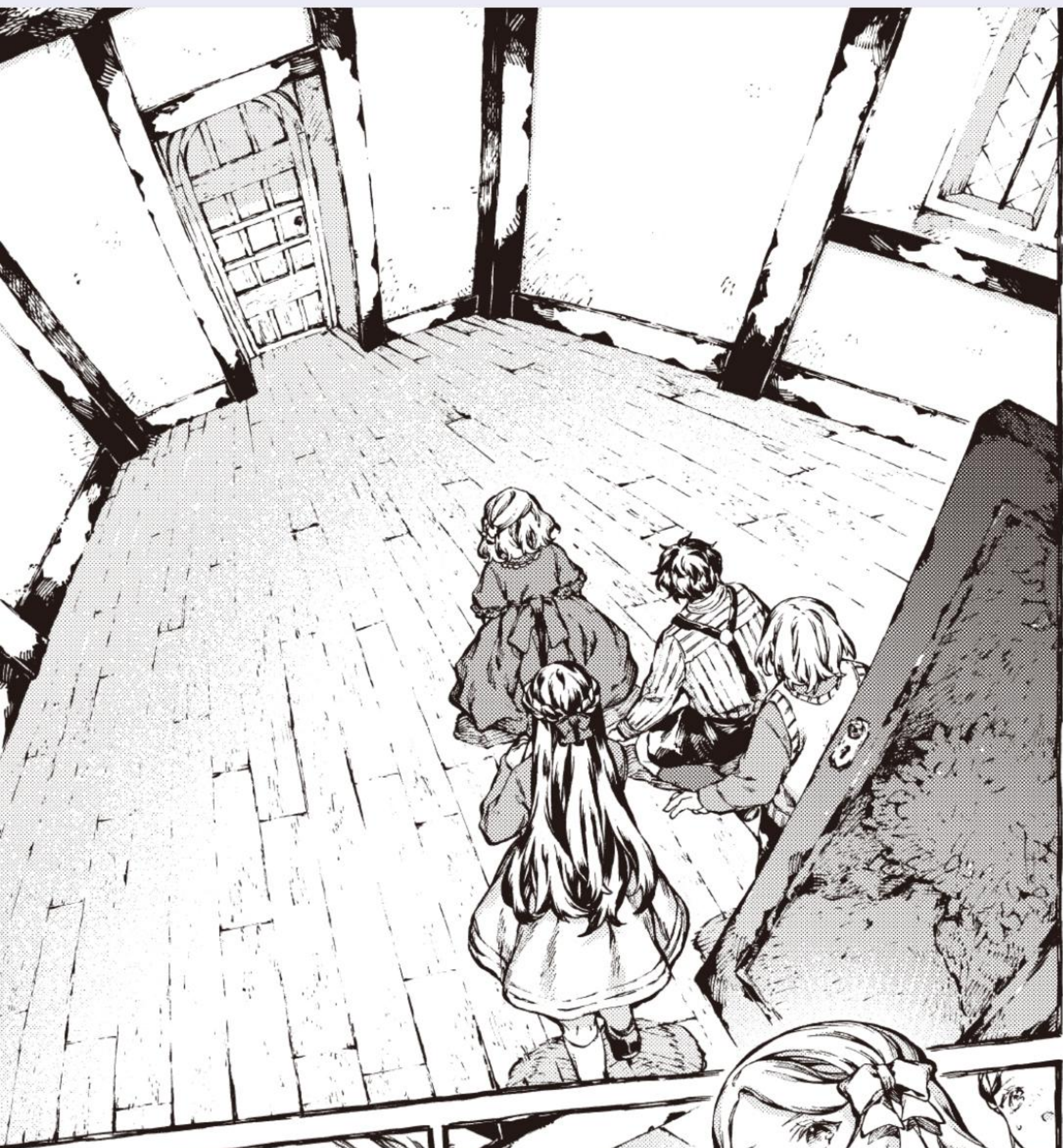


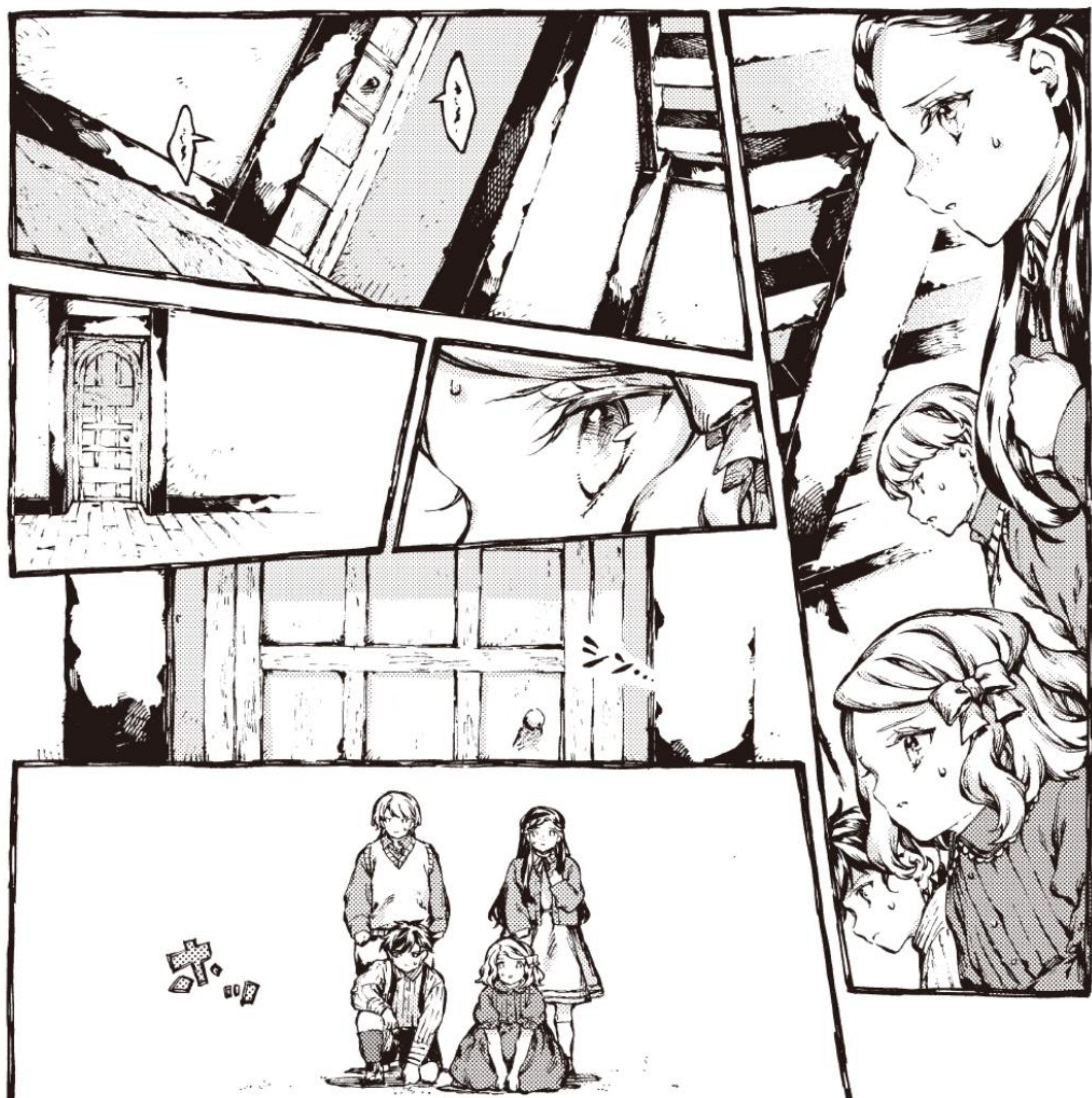
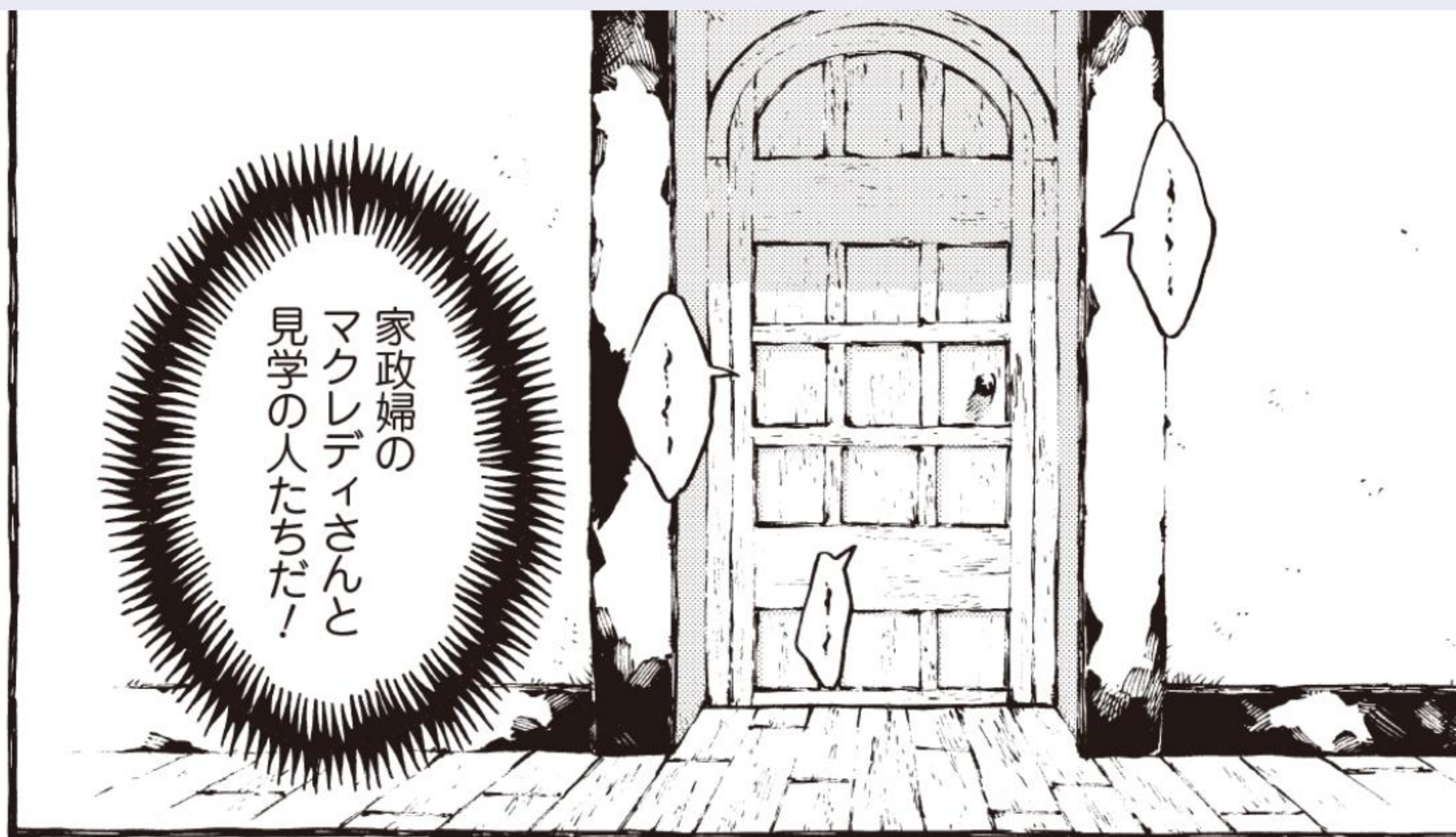
…さきほど
見たもの……

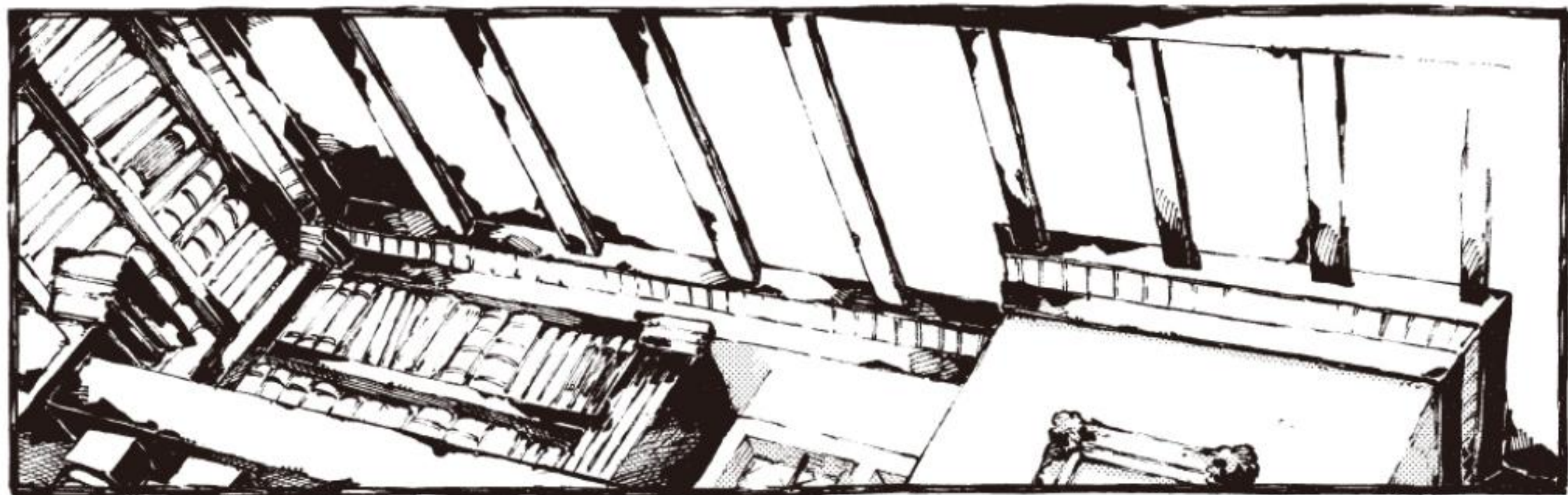
あれは…
「街灯」という
名前だった

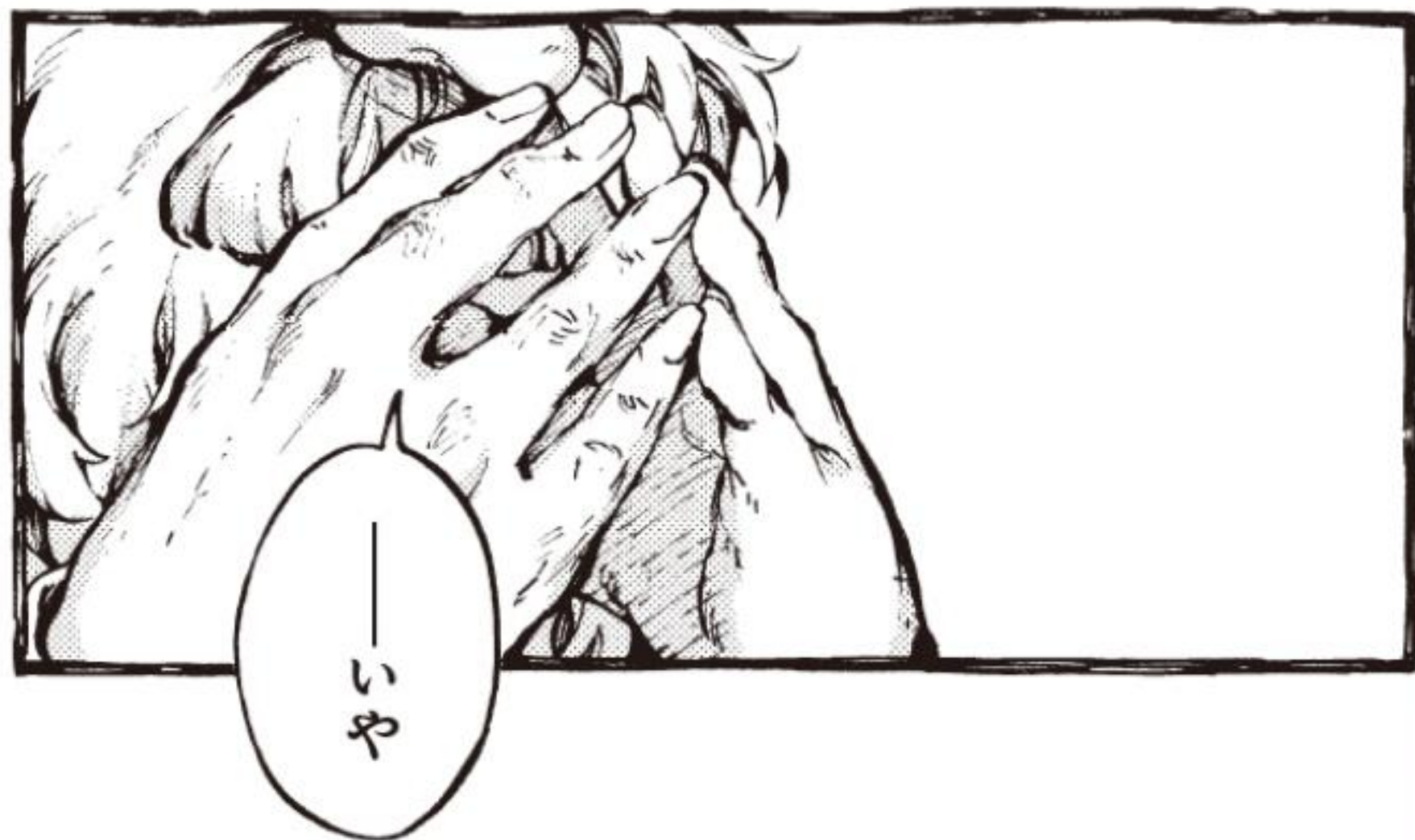
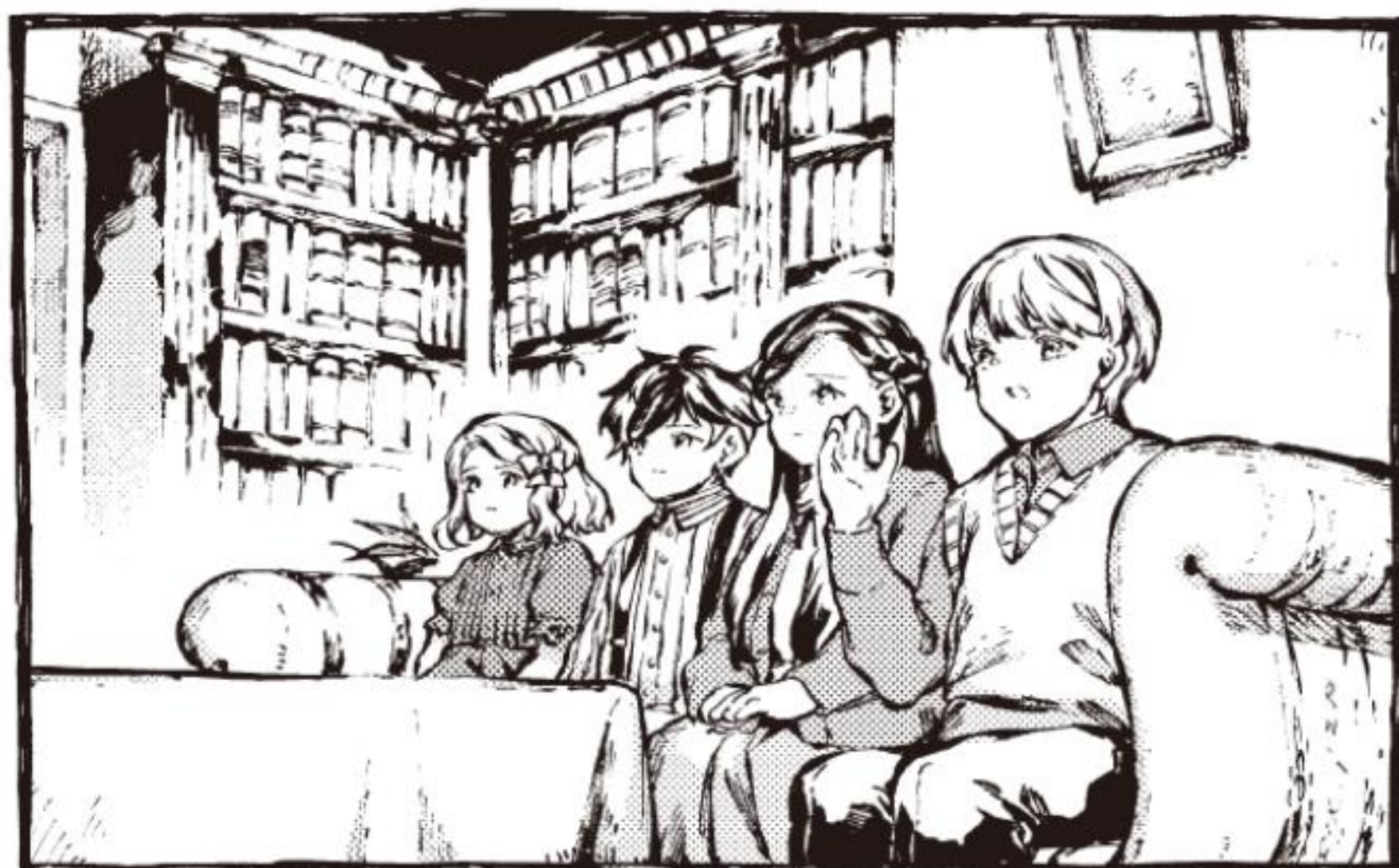














コートを取りに
もういちど
衣装だんすから
むこうの世界へ
もどろうとする
考えには
賛成しかねる



そのルート
からは

もう二度と
ナルニアに
はいることは
できないだろう



それに

たとえ
取りもどしたと
しても

もうコートは
使い物に
ならんだろう！

え？

何だって？



ああ

もちろん

いつかまた
ナルニアに
もどる日は
来るだろう



しかし

同じルートを
もう一度使おうと
考えてはいけない



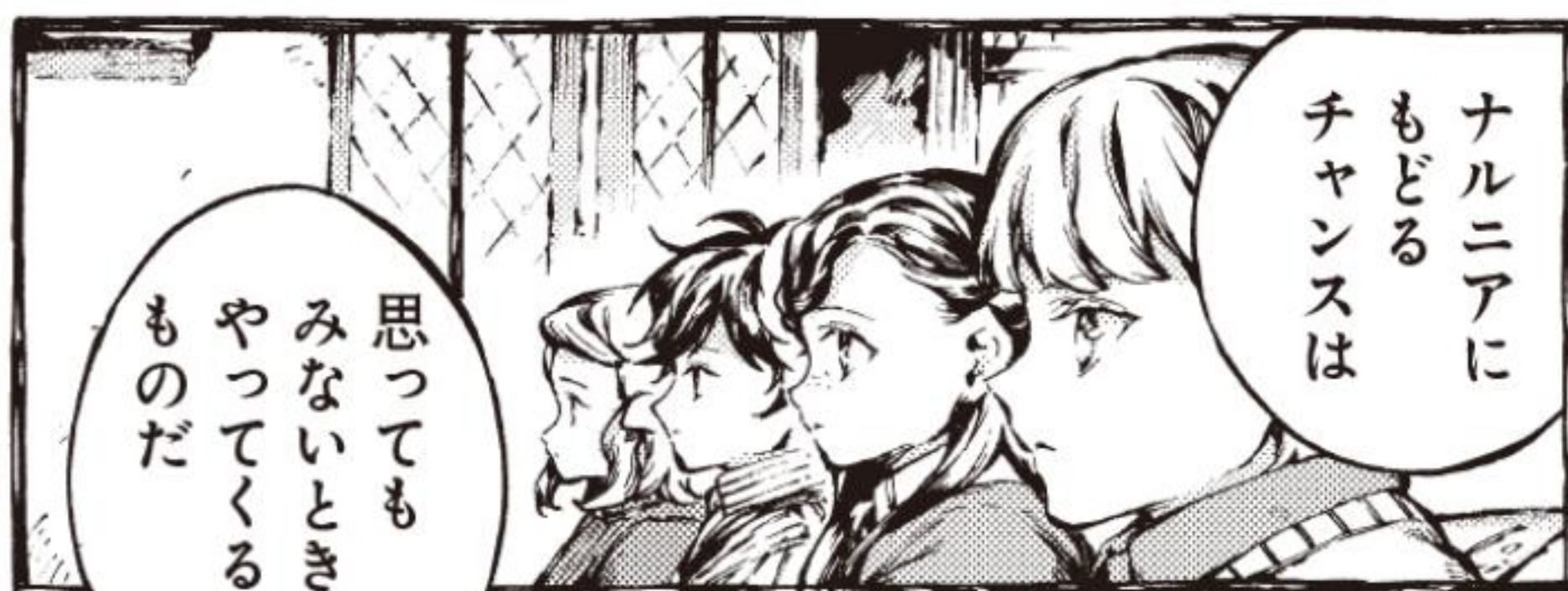
一度
ナルニアの
王座に
就いた者は

終生
ナルニアの王
なのだからね



というより

自分から
ナルニアへ
行こうとしては
ならない



ナルニアに
もどる
チャンスは

思っても
みないときに
やってくる
ものだ



それから
もうひとつ

きみたち
きょうだいの
あいだでも

ナルニアのことは
あまり話題に
しないほうがよろしい

ほかの人
にも

話を
しないように

その人たちが
同じ冒険を
してきたことが
はつきりしている
場合は別だがね

なんだって？

どうしたら
わかるか
……って？

ああ

それは
ちゃんと
わかるよ

そういう人たちは
風変わりなことを
言うからね

目を
よく開いて
見ていなさい

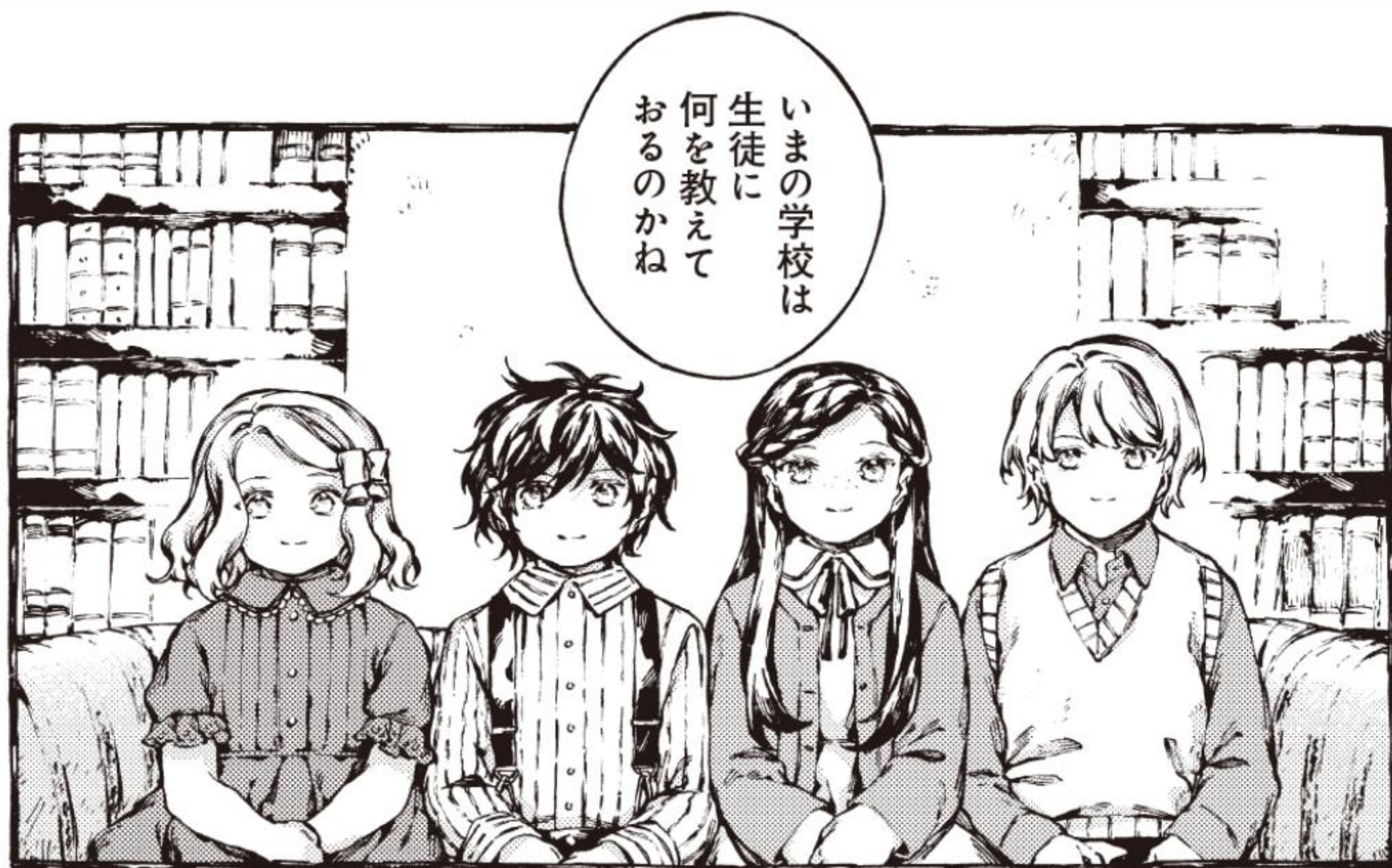
それに

見た目も
変わっている

だから

おのずから
秘密があらわれて
しまうのだ

まったく



これで

衣装だんすの
冒険物語は
終わりだが

教授の
言うことが
正しいとすれば

これは
ナルニアの
冒険物語の
ほんの始まり

という
ことになる

おわり